



事務局 内子分庁3階
 ☎ 0893(44)2114
 fax 0893(44)6137
 ☎ <http://utia.jp/>

内子町とローテンブルク市を結ぶ人々からのメッセージ_2

まちづくりとしての姉妹都市提携

執筆者

法政大学現代福祉学部・大学院人間社会研究科教授
 岡崎昌之さん

◎岡山市出身。財日本地域開発センターで企画調査部長、月刊『地域開発』編集長などを経て、1994～2000年まで福井県立大学教授、01年～現職。06～07年学部長として、同大学の自治体推薦制度を確立。専門は地域経営論。自治体学会代表運営委員、地域づくり団体全国協議会会長、国土審議会専門委員等を歴任。



ドイツ・ローテンブルク市との姉妹都市提携に向けて、着々と準備が進められているとのこと、内子町にとってまちづくりの新たなきっかけになると、期待しています。ドイツの地方自治体は姉妹都市提携を結ぶことには、とても慎重だと聞いています。ローテンブルク市としてもアジアの都市と姉妹都市を結ぶのは、内子町が初めてとのことだそうです。

それは第二次世界大戦中の米軍による爆撃から立ち直り、町並み保存に地道に取り組んできたローテンブルク市民の誇りなのでしょう。そんなじよそこの都市とは、安易に姉妹都市を結ぶことはしないという決意です。そういうローテンブルクの自治体と市民から、姉妹都市提携の相手として、内子町が選ばれたことは、これまでの両自治体の交流の実績と、ローテンブルク市民が納得する、地道で持続的なまちづくりを内子町の皆さんが担ってきたという証しでもあります。

姉妹都市提携に至ろうとすることを思いますと、昭和61年に、改装された内子座を舞台に開かれた「内子シンポジウム'86」のことを思い出します。当時、ローテンブルク市長であったオスカー・シュューバルト市長を、内子町に迎えようとするとき、私たちは「ぜひとも河内町長（当時）のご自宅にお泊りくださいたいはいかがか」と進言しました。西ヨーロッパの人たちにとって、個人のお宅に招かれ、宿泊できることは、何にもまして信頼関係を高めることに通じることだからです。河内町長は快くそのことを受け入れてくださり、それにより内子町とローテンブルク市の信頼関係は一気に高まったと思います。

シンポジウム開催の翌年、内子町民の代表は10数人の代表団を編成し、ローテンブルク市を訪れました。行政関係者のみならず、多くの民間の皆さんが参加し、ローテンブルク市民と交流しました。受け入

れてくださったシュューバルト市長の寛大なもてなしは感激に値するものでした。こうしたことを契機にした姉妹都市提携は、内子町にとって今後どうあればいいのでしょうか。最も望ましいのは、これからの内子町の新しいまちづくりにきちんと結びつくものであるということです。とかく姉妹都市提携は名目的、儀礼的で、町長や議員の交流だけに終わりがちです。内子町ではそうではなく、町民の皆さんがローテンブルク市と直接、さまざまな文化的、経済的な交流の実績を上げていくべきです。熊本県小国町には、町が中心となって運営する九州ツーリズム大学の卒業生がドイツで食肉加工のマイスター[※]を取得し、町内に「デュッセル」という店を開き話題になっています。内子町内にローテンブルク由来の常設店などが開かれれば、新しい内子町のブランド形成にもつながるのではないのでしょうか。地道な姉妹都市提携の進展を期待しています。

※マイスター＝ドイツで、徒弟制度による職人の最上位。親方。師匠。